



公益財団法人日本都市センター／編集

地域公務員になろう

今日からあなたも地域デビュー！

職場外の活動が本業に生きてくる

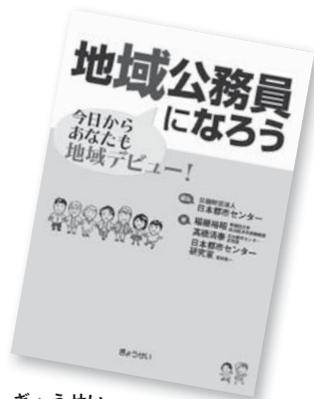
評者 関西学院大学 小西 砂千夫

高知県の地域支援企画員が今秋、全国ネットのドラマになるなど注目を集めている。地域支援企画員は、高知県独自のしくみであり、「土木や農業といった部門ごとに配置された県の出先機関に属さない職員で、縦割りの組織に縛られず、職員の自由な発想で自主的に活動」し、「市町村と連携しながら、実際に地域に入って、住民の皆様と同じ目線で考え、住民の皆様とともに活動することを基本に、地域の自立につながるよう、主体的な住民の皆様の活動に対するアドバイス、先進的な事例の情報提供」などを行っている。

基礎自治体である市町村中心主義を採る場合、都道府

県は中二階となる。それを打破しようとする、道州制のように県が統治機構に近づく方向もあるが、高知県のほか、小規模町村を念頭に置いて、市町村間の垂直・水平の補完を徹底して行っている奈良県の例もある。県が、職責として市町村の領域に入り込んででも、住民生活を黒子として支援することが時代のニーズである。

公務の枠組みのなかで、公務員が自ら参加する地域づくりのウエイトが大きくなることと並行して、公務外にあって地域に飛び込んで住民の一員として活動することが、方向性として求められてきている。本書の提言する地域公務員がまさにそれである。



ぎょうせい
定価：1,429円＋税



自治体職員の間には、消防団もPTAもスポーツの指導者も、半強制のように引き受けている方がおられる。本書は、そうした活動はもちろんのこと、それを超えた社会支援の諸活動の記録を収め、参加者である地域公務員がそこから得た気づきを率直に語ったものである。

地元のまちおこし↓「公務員だから。」は言いません！
子ども・PTA↓飛び出して、頭こすって、火をおこす
生活困窮者支援↓「事務屋」の実力

どれも

障害福祉関係のボランティア活動↓無理せず「できる
しこ」で家庭円満

神奈川県産品の地産地消推進↓「好き」という確かな
コンセプト

青少年スポーツ指導員↓職場に家庭に感謝です
など、全部で20の体験記が、一人称で生き生きと紹介されて
いる。公務員が地域活動に自覚的に入り込んだときに、
公務員としてのミッションが明確になり、アイデンティティが
強化され、公務員として職業的に身につけた技術が生かされ
る喜びも感じられる。そして、職場外の

活動が、本業である公務員の仕事に生きてくる。本書の中心的なメッセージはそこにある。人口減と高齢化で、地域力の維持は困難であり、戦力としての公務員への期待は大きい。同じやるならば受け身ではなく、自覚的にできれば仕事にプラスにしたいものである。

参加にあたって注意すべきことがある。本書では、日本都市センターの調査のなかから、私生活が拘束されすぎたり、公務員批判を浴びたり、公務員だからやって当然と受け止められて重荷になるなどの傾向があることも紹介されている。参加にあたってどこで一線を引くかを考える重要性も、本書は指摘している。

本書の冒頭で、稲継裕昭教授は、法律のうえで、地方公務員は役所での職務に忠実であることが求められ、勤務時間外の社会的活動を少なくとも推奨していないことを示している。その意味でも、地域活動にあたっては公務とのバランスを図ることが求められる。

それでも地域活動に公務員を駆り立てる何かがあることを本書は思い起こさせる。職業に生きた証を求めるのは当然である。公務員バッシングは厳しいが、それにめげない生き方を見いだしていただきたい。